如きは其功勞に依りて紀念せらるゝのみならず、崇拜は常に其性格を道德的に理想化し、祖神は又道德的標本となれる者なれば、此は彼の咒力的英雄崇拜よりも一層純朴に俊傑欣慕の人情を代表せる者といふべし。八幡太郎が如何に源氏武將の摸範として、八幡大菩薩に拜て源氏の氏神たる勢力を有し、東照宮が德川三百年の治績に如何に、明主神君として治者政治家の人物を養成し、其他諸藩の藩祖が各其子孫藩士の標幟たりしかを考ふれば、氏神の崇拜なる者は、其利導啓發の方法如何に依りては、如何に教化の要具となり得るかを示して餘あり。

今日町村に星羅せる鎮守、產土神、氏神の祭祀は、社會教化の上に効益なきは、先覺の之を指導啓發せざるに因る、若し氏神鎮守の事蹟功勞を明にし、其が土地の開拓者たり、又は古は地方一圍をなせし氏族の祖神たる性格人物を明にし、之を教化に適用せば、人情自然の英雄崇拜及其に密着せる祖先崇拜を以て、人格修養の一勢力となすを得ん。若し又此の如き祖神たらざる者にして氏神と稱せられ、功勞者にあらずして

鎮守たる者あらば、其が果して淫祠として起りし者にあらざるや、現在の信仰の如何なるやを調査して、之が矯正を謀らざるべからず。

咒力的英雄崇拜に至りては、其弊害の矯正困難なるだけ其れだけ勢力の及ぶ所も大なる者なれば、社會的教化、倫理的修養の爲に力を盡して、其崇拜を清淨にし祈願の性質を除去するを勉めざるべからず。例せば天神として崇拜せらるる菅公の如き、人物として又其經歷境遇も優に人の同情を惹き、英雄欣慕の對象として人間の一方面に於て理想的摸範たる勢力を及ぼし得べきも、而も菅公の事は僅に小學讀本の一隅に其の事蹟を敘するのみにして、其の數多き社殿祭祠は殆ど道德上の勢力と相隔絕せる感なくんばあらず。北野天滿宮に至りて其講中なる者が何の意志を以て社殿神饌の資を奉納せるかを觀察し、太宰府天滿宮に行きて其賽者が何等の祈願を神前になせるかを稽査せよ。菅公が天神となりて却て其人格的感化力を失ひしを知るに足らん。

余は全國無數の天神祠が有形の菅公傳たる實なきを悲み、神職が徒に

神供祝祠の末に走り、教育家亦此間の勢力に着目するなきを嘆ずるを禁ずる能はず。世の菅公に對する英雄崇拜的意識をして倫理的修養に有効ならしむるは、一に其人格境遇を發揮し、見識あり才德あり、忠篤にして熱誠なる人間としての其性格を欣慕同情せしむるにあり。之を天神、火雷神として拜せしむるにあらず、誠實の人間として之を崇拜せしむるにあり。

要之、余輩は、我國の宗教には英雄崇拜の勢力甚大なるを見るも、其の祖先崇拜に關聯せる者は氏神なる空名を留むるのみにして、國民の教化修養に何等の効力なく、其の俊傑勇士を拜する者は、其神咒力の祈願に走りて人格欣慕の實力なきの現狀を悲しむ。即余輩の希望する所は、教育家たる者意を此に留め、英雄の咒力祈願を轉じて英雄の人物崇敬たらしめ、倫理的教化の實力たらしむるにあり。氏神が氏の祖先として、或は地方の開拓者として、其人物功業の追慕に依りて崇拜せらるるに至らば、氏神、鎮守は學校、教會と相并で町村の道德的勢力たるべく、

菅公、清正公も各其人物の感化に依りて一般人民を教化するに至らば、國民の教育は此に一援勢を得たるに均しからん。

(三十二年八月)

外篇第三

雜纂

世界有情、盲者能視、聾者能聴、瘂者能言、狂者得念、亂者得定、貧者得富、露者得衣、飢者得食、渇者得飲、病者得除、醜者得端嚴、形殘者得具足、根缺者得圓滿、迷悶者得醒悟、疲頓者得安適、諸有情等心相向、如父、如母、如兄、如弟、如姉、如妹、如友、如親、……身意泰然、忽生妙樂、

大般若經緣起品

ショペンハウエルの性行

一世の奇男兒ショペンハウエル熱情憂憤の一生をマイン河上のフランクフルトに終りてより玆に幾春秋、今月の二十一日は實に彼が三十五回の忌辰たり。今や此巨人が絶東の新興國に幾多の景慕者と崇拜者を得んとするの時、又恰も此忌辰に近きて、吾人は轉彼が性行人物を追懐せずんばあらず。世を厭ひ人を惡み、冷笑諷刺の妙を盡し熱罵痛論の激を極め、ヘーゲル、英國、猶太の三者は之を蛇蝎の如くに憎惡罵倒し、ウパニシャド、プラトーン、カントは天上の光明の如くに欣慕信奉措く能はざりしが如き、彼の性行は多くは尋常規矩の外に脱出し漂渺天馬の大空に狂奔するが如き者あり、豈快男子と云はざるべけんや。ユリウスラウエンスタド曾てショペンハウエルの全集を開版し、又彼が一生と性行とを記する事頗る詳なり、今敘述主としてフラウエンスタドに基く。若し此に依りて快男子性行の幾分を讀者に介するを得ば幸

なり。

ショペンハウエル曾てプラトーンが說に依りて人の性格を分ちて εὐκολος と δυσκολος に分つ、即快濶と沈鬱となり、而してショペンハウエルは實に δυσκολος なりき。何れの事物も彼が心に對しては不快の感を起さゞるなく、常に幽鬱にして人を信親せず、又頗る猜疑の念に富みたり、書信に接する毎に其憂ふべき事を齎らしゝにはあらずやとの憂慮は、先づ其心を痛め、幸にして其憂ふべき事なきを知るや、此と共に此書狀は其實を蔽へるにはあらずやと痴疑するは彼か常なりしといふ。然れどもデュスコロスなる人又一得なきに非ず、ショペンハウエル自らも云へり、

何れの害惡も全く其報償なきは稀なり。沈鬱にして憂慮に傾き易き人は、常に寧ろ想像的の不幸と憂慮に沈むを以て、快濶無憂の人の如く實事上に不幸と憂慮に陷る事少し。其故は一切の事物を暗黑と觀じ、常に大惡害の來らん事を恐るゝ者は、又之が準備を

怠らざるを以て、事物を見る常に快濶なる彩色を以てする人の如く誤算する事なし。

ショペンハウエル又曾て人の性格を分て、熱情的に現在事物に動かさるゝ者と、冷淡に理性に訴へ概念的に生活せる人とを分てり。而して自らは實に此の前者にして、熱血常に情緒を動かし、眼前の事々物々に對して少しも抑制する能はざりき。其千八百十四年ドレスデン府に在るや、自ら記して曰く、

余は新しき狀態、新しき境遇に入る毎に其始は必ず不滿不快ならざる事なし。是れ蓋し己が豫め新狀態を想ふに當りては、理性の指示に從ひ概括して之を見るも、其一旦之に遇ふや、現在の事物は總て豫想よりは活潑々地に己を動かし、此現在の感化に動かされては理性を以て、現在の外を達觀する能はざるを以て、總て豫想したる所の者を此現實より求めんとするが爲ならん

と。感情に富む者は常に眼前の事物に感動し易く、如何なる事も其

情緒に根觸して熱血を激動せざるなく、理性の眼を以て無頓着に對岸の火災視する能はず、能く泣き能く悲み又能く笑ひ能く喜ぶ。感情の動く所判斷の力之を制する能はざるに至る。ショペンハウエルが曾て伯林府に在りし時、怒に乘じて一老女を戸外に投じ、不具に至らしめ、爲に一生之を養はざるべからざるに至りしが如きは、其の熱情的にして現在に動かされ易きが故なり。

熱情的なるショペンハウエルは又甚しく空想の力に富みたり。彼は己が感觸に入るべき實事なき時に當りても、其想像の力は彼に感動の原料を與へて、心火常に消ゆる事なかりしを以て、閑坐獨棲も彼に取りては、少しも無聊寂莫と感ぜしむる事なかりきと。其言に云く、

理性にのみ動きて他の力乏しき人は、他に接しても溷達ならず、亦獨棲に耐ゆるの量に乏し。慨念的に生活する人は、其他に直覺的の活動を缺くを以て、之を交際の間に補はざるべからず。之に反して想像の力旺盛なる者は、想像に依りて十分の直覺をなすが故

に、實物をも又社會をも離るゝを苦とせず。

獨坐閑居しても消ゆる事なき熱情は、日常尋常の事に遭遇すれば、又燃ゆるが如き詩的想像を煽動するの因なりき。ショペンハウエルは誠に詩人的天才にして、事物を見るも常に之を觀念の鏡に映じて望み、特殊の狀態を審にせず、爲に常人の見ざる所を見、常人の感せざる所に感動し、悲喜の轉動、憤激畏怖の發表、人の計り難き者ありき。

天才は常に狂氣に近きが如き狀を呈す、ショペンハウエルは時には自ら高聲に語り、時には忽にして笑ひ、又忽にして似聲をなし、一見殆と狂人の如くなりしと。醫師ザイドリッツなる人は「醫學上より觀察したるアルツル、ショペンハウエル」なる書を著はし、彼を以て誇大妄想の患者なりと斷定し、其知覺の異常に鋭敏にして又痛激の心勞働に耐ゆるが如き、皆其腦の遺傳的構成狀態あるが爲にして、誇大妄想症に罹り易き性を有し、ショペンハウエルは既に之に罹れる者なりと云へり。ドクトル、アーセル亦、ショペンハウエルの精神病學上に審査せらるべき人なる

事を論じたり。然れどもアーセルはショペンハウエル自ら天才と狂氣との相近きを說きて敵手に武器を與へたる者なりと說き、終に云へり、

ショペンハウエルが常に天才と近しと呼べる妄想は、決して誇大妄想に似たる者なるべからず、沙翁の所謂る

The poet's eye, in a fine frenzy rolling,
Doth glance from heaven to earth, from earth to heaven.

的ならざるべからず、

と、思ふに誇大妄想なる者は、眞價もなきに、自ら尊重し誇大的の妄想に陷れる者ならざるべからず。ショペンハウエルの如きは自ら大なりと信じたるも、其實亦之に副はざりしに非ず。彼は自らヘーゲル、シェリングを凌駕せりと信じたるも、固より窮措大が自ら一國の政を善くすべしと誇張するの類に非ず。又謙遜退讓自ら小なりとする者必しも大人に非るなり。人豈自ら知らざらんや、自ら眞に偉大なるを覺知して自ら重んずる者必しも誇大症に非るなり。ショペンハウエルを目し

て自ら過重したりといふは是なり、然れども之を目して病的となし誇大妄想症と斷ずるは甚非なり。天才往々俗人の爲に輕んぜられ、大人多くは病的と誤らるゝは是非もなき事なり。

狂氣に近きショペンハウエルの行爲は常に尋常規矩の外に出て、熱情の迸る所常道を逸脫し、才智の馳する所毀譽を意とせずして事をなす、社會輿衆の褒貶に數々とし細心世に處するが如きは、此鬱勃たる天才の耐ゆる所にはあらざりき。此故にショペンハウエルは、商家の小僧としては主人の命を守らず、自己の好む所の書を繙くを事とし、爲に解傭せられ、中學にありては師を嘲りて永く之に留るを得ざりき。放逸不羈は彼が特性なりき。慈母も之と共に居れば惡夢を結ぶと云ひしが如き、其粗落の行を想見すべく、彼が師フヰヒテのWissenschaftslehre(知識論)講義に戲れてWissenschuftsleere(知識虛)と書せしが如き、其狷介の性を知るに足るべし。小心世の褒貶に關心し、謹愼細行以て德行の要を得たりとなす人々は、此の如き放逸狂奔の行爲を見ては、直に不德とし無道

と貶せり、是に於て知力上にはショペンハウエルを以て狂疾と斷ぜし者ありしと同じく、道德上彼を責罰すべき罪人と見る者少しとせず。

特に世の學者が、ショペンハウエルを責めんとするは、其が名譽上の私怨の爲、口を極めてヘーゲル等先輩を嘲罵したりといふ點にあり。然れども是れ思はざるの甚しき者なり。ショペンハウエルが一生の初半は憤懣不平の中にありしは事實なり。十分の名聲と勢力とを豫想して其大著作を印刷に附し、直に以太利に旅立し、如何なる動搖を思想界に與へたるかを夢想しつゝ歸來すれば、其書は徒に書舗の店頭に堆く、世は其書名をも知らざりしが如き、いかで此詩人的多血男子の心緒を動かさゞらん。又彼が先天的に忌嫌せしヘーゲルの思想、學界に洽く、己が價値なしと斷じたる一大學教授なるフヒテが名譽賞讃の中に包まるゝを見て、此熱情短慮の天才は奚ぞ其不平を長ぜざらん。彼は世を罵て俗と稱し、卑といひ、衆に遠かり、人を惡み、全く一個の厭世家、一個の Misanthrop となり了れり。大學の教授は彼の眼には心中無一物に

して、徒に講壇の上に口舌を弄し、世を嘲し自ら欺く者と映じたり。然れども其の此に至りしを以て、世の論者の如くショペンハウエルを以て私利の爲に世を惡み、私慾の爲に人を罵る者となすは太た非なり。ショペンハウエルは此の如き卑劣の情に動かされて此の如きに至りしに非ず。櫪槽の間にある天馬を以て徒に名譽の爲に平ならざる者とし、三保の松原に降りし天女が人間を卑しみ自ら高しとするを以て、徒に私欲の爲に慨する者と見るが如き事あらば、人誰か之を笑はざらん。ショペンハウエルは人中の天女なりき、櫪槽間に老ゆる天馬とも見るべし。彼は自己の名譽なきが爲に世に平ならざるを增し、俗輩社會に飛揚するを見て憤懣を長じたる事はあるべし。然れども此天才は先天的に世と合はざるの性を享けて生れたる者、罪(若し罪といひ得べくんば)は彼が賦性にあり、否天公が此逸物を此濁世に下したるにあり。且つや彼がヘーゲルを好まざりしは、既に其青年の時にあり、名譽上の關係より始めて之を憎惡したるには非ず、此事は彼が當時フロンマンな

る人に送りたる書簡に徵して明なり。彼が廿五歳の時、即其大著完成の五年前、既にヘーゲルの論理學を讀みて、殆と之を輕侮憎惡したるは明白なる事歴たり。

ショペンハウエルがヘーゲルを憎惡し、シエリング、フヒテ等を輕んじたるに附加して、人は彼を以て先哲前輩の功績を認めず、其恩德を知らざる者と責むるあり。然り、ショペンハウエルは其憎惡し若しくは輕侮したる先哲の功を認めざりき。否彼は此等の人を以て滔々たる俗流と同一視し、之を先哲先進などとは夢にだに信ぜざりしなり。先輩とも大思想家とも見ざる人々に對して、其恩德を知らざりしを責むるは、甚酷なる評といはざるべからず。是れ己を以て他を律する者、人を評するの道に非るなり。ショペンハウエルは、論者の言に反して、實に先哲の功績を認め、殆と之を過重し之を崇拜せんとするの傾向ありき。彼が如何にウパニシャドの哲學に心醉したるか、如何にプラトーンの觀念論を崇拜欣慕したるか、又如何にカントに敬服したるか、ショペンハウ

エルの著を讀みし者は何人も之を認むるに難からざるべし。詩人的の天才として彼れが好惡愛憎の情に强かりしは、敢て咎むべき事かは。然れども此を以て、ショペンハウエルは他人に心醉して自家思想の獨立を失ひしとはなすべからず。カントを最も景慕する彼の手に成りしカントの批評は、カント攻擊の最も嚴密なる者の一なる事は、明に彼が堂々たる獨立の思想家たるを示すに餘あらん。狷狂不羈なる詩人的哲學者は、己と合する者は狂喜之を迎ふるも、己と違ふ者は少しも之を容るゝの寛容なかりしなり。

要するに、ショペンハウエルは天賦の厭世家なりき、彼の主觀方面の我情は、到底客觀的社會と調和する事能はざりしなり。故に彼は曾て自ら述べて曰く、

人の世に在ること永きに從ひて、腦髓と心臟は益す相反き、其主觀的感情は愈客觀的知識と背馳す、

と、ショペンハウエルは誠に可憐の憂鬱家たりき。云はゞ感情なる惡

魔の爲に從へられて之に勝つの力なかりしなり、若し彼が性をして少しく自ら負ふの心を殺滅せしめば、彼は世を罵りも得せず人を嘲るの勇なく憤死せしならん。然れども、天は幸に此天才に自尊の情を與へて、其情に脆きの性と合せしめたり。是に於てショペンハウエルは常に平ならず常に憂悶する放逸兒として其特色を存したり。

ショペンハウエルは日常生活の標準として常に自ら稱したり、「賢者は快樂を求めず、無憂を求む」と。此故に彼が最も注意したるは身躰の健康にありき。王者たるも常に病床にあらんよりは、寧ろ乞丐たるも健全ならんとは、彼の志望にして、世人が或は名譽の爲或は營利の爲、其他博學とならんと欲し、又は快樂を貪らん爲に健康を害する者多きを、彼は至愚と罵りたり。健康は百福の本とは彼の奉する格言なり。ショペンハウエルは夙に生理學を修めたれば、衛生の法に就きては頗る通達する所ありしなり。

一日に一二時間づゝ戸外に運動する事は必須なりとて、彼は毎日午

後に至れば、飄然一頭の愛犬を率ひて郊外の林間人なき所を散策するを常としたり。其眺望ある所に至るや、必ず佇立之を久うし、天然の美を賞し、其整然又端然たるを見以て無上の樂とせり。又彼は神經を過度に刺激し、筋肉を用ひずして萎微せしむるは、最も健康に害ありとて常に躰操運動を怠らざりき。加之冷水浴は其最も好みし所にして、九月迄は雨天たりとも、必ず清冽なる河水に浴したり。腦髓を安息し活潑にせん爲には、最も安眠を重んじ、猥に夜業に從事したる事なく、又食後、運動後には少しも腦髓を使用する事を爲さゞりき。晨起後二時間は其が勉勵事をなすの時なり。二時間を經て朝食し、後一時間は安靜に休息し、而して後講義をなし、此より戸外に遊び、家に歸り書齋に入りて新聞紙雜誌の類を閲す。夕は劇場を覽、又は音樂合奏を聞きて過ごし、睡眠に就く前には多くは書を繙きたり。但し其書は彼が聖典とも仰ぎ、之に死を托すべしと迄云ひたるウプネカットなりき、即波斯譯より重譯したる羅甸譯のウパニシャドなり。彼が印度哲學殊に吠檀多派の

哲學を愛したる事以て見るべし。

ショペンハウエルは一生曾て室を娶らず、彼は無室を以て學者の本分としたり。故に曰く、

學者美術家の中に就て、妻を娶りたる人は、學問美術の幸運を思はずして自己の事に從へる者なれば、甚だ惡むべき者なり、

と。結婚するを宜しとするや否やといふ問題は、戀愛の爲に心を苦むると、衣食の爲に營々たると何れか是なる、といふ問題に同じとは彼が常套の語なりき。

ショペンハウエルの家政は單純素朴にして常に節儉を旨としたり。是れ父の敎なりしと云ふ。

其室内も華麗なる裝飾を施さず、一隅なる大理石の棚には金色の佛像を安じ、机上にはカントの塑像を置き、安樂椅子の邊にはゲーテが肖像を掲げたり。四周の壁に懸けたるはカント、シェクスピア、デカルト、クラウデウスの畫像、其他家人の像、自己が幼時よりの幾多の肖像、故人の

手蹟等なりき。彼が愛犬は常に其傍に侍したり。

ショペンハウエルは實に當世の仇敵なりき、現時の事物は一として其愛を引くべき者なく、現時の人と交る事なく、殆ど現時以外の人間にして、只古代古人をのみ欣慕したるの傾あり。然れども彼は當世の事物に注意する事は敢て薄からざりき、新紙の類は之を熟讀し、社會、文學、宗教の問題に注意を怠らざりしと。死後其書齋を檢したるに、諸國の新聞紙を切拔して集めたる者ありしといふ、其著書に事例を引用したるが如きは、此の如き注意より得たる者ならん。

彼が晩年に及びて、名聲漸く揚り、其說稍世人に知らるゝに及びては、諸方の學者文人にして此老哲學者を訪はんが爲に、マイン河上風光明媚の都府に來りし者甚多かりしと。而してショペンハウエルも亦、此等の人と談論し腹心を吐露し以て樂としたり。其晩年には交遊したる人も少なからざるが如く、其世を惡み人を惜む事も大に減じたりと。特に彼の著書が民間に多くの讀者と信奉者を得たる事は、甚た此不平

家を慰藉したるが如し。一般の良民が信服するは、眞正の熱情に出でし者なれば、浮薄の學者輩(彼は常に所謂學者なる者を浮薄無知而も虚聲を張る者と稱したり)の吸々は少しも念頭に懸くるに足らずと、是れ彼が抱負なりき。

ショペンハウエルは齡七十を超ゆる迄頗る健全の生活を遂げたり。七十二歳の春より時々心臟鼓動呼吸屏息等を患へしが、數月の間は差したる事もなく經過したるに、九月に至りて其廿日の朝突然卒倒したり。翌朝は敢て平生と異なる事なかりしに、婢が室を掃ひて戸外に出で再び入り來れば、白髮の老哲學者は既に呼吸を絶して、安樂椅子に眠るが如くに倚れるを見たり。彼が遺言書には其財産分配を隈なく記し、一部は戰爭負傷者の救助に、其他親友より家婢愛犬迄各分配を指定しありたりと。愛すべき終焉なる哉。

フランクフルト北邑の墓地萬籟寂たる邊、常綠の樹に圍まれたる中、黑色のベルギ華崗岩の削れるが横たはれるは即此哲學者の四大が安

息せる所なり。碑面には彼が遺言に從ひ何事をも記入せず、只 Arthur Schopenhauer. の字を刻せるのみ。

(廿八年九月)

人生と天然

(一)

世界は或度迄は人間の世界なり。天然萬有といふも、誠人心より獨立したる天然は、吾等の知り得べき所にあらず。文學も美術も徹頭徹尾人生を中軸となすべし。美術は實在を理想化するといふも、此事實に根據を有する者なり。如何なる客觀的詩人といへども、此意義に於ては到底主觀的なるを免れず。然りと雖も純朴なる實在論と單純なる觀念論とが正中なる哲學的立脚地にあらざると同じく、人事一偏の文學も、天然一方の詩文も、共に大なる文學をなすに足らじ。大宇宙は小宇宙に映じ來て始めて大宇宙の價値を保つべく、小宇宙は大宇宙に待ちて始めて成るべし。天然と人生とは交差錯雜因陀羅網の如く融通相映じて、始めて宇宙の大觀をなす。文學美術亦此無礙の圓融境に住して、洵に宇宙の美を發揮すといふべきなり。

古往古來、詩人哲者多く此一面に偏し易し。野草離菊に天然の甘美に醉ふ者は、概ね莊偉なる人生の大觀を忘れんとし、人間生活の參差粲爛にして感情意志の微妙神祕に心奪はるゝ者は、多く市井の外に山野天然の端嚴偉大なるを見ず。人心の小宇宙に戀着せざるの天然詩人は誠に大宇宙を詠じ得るの人にあらず、天然の大宇宙を顧ざる人生詩人は十分に人間を歌ふの人にあらず。余輩は此二面の無礙なる交差圓融をゲーテに於て見る、客觀的主觀詩人、主觀的客觀詩人たる彼を有する獨逸の國民文學は又多幸なるかな。

(二)

眼を轉じて我邦の文學を見よ。吾人はゲーテの片影を求むれども、容易に之を得ざるなり。純朴なる萬葉の詩人は云はずもあれ、平安王朝の詩人は如何。彼等は釋迦が深痛幽邃なる無常觀に感化せられたるが爲に、客觀界に對しても多情なりき、主觀界に入りても多涙なりき。然れども彼等の多數は歡樂極めて悲哀多し底に、宇宙の悲哀を觀じた

るなり、快樂幸福主義の立脚地に立ちて釋迦の無常觀に打たれしなり。此を以て彼等は佛教の悲壯的觀念に至りては與り知らざる者の如く、感情一片に多恨多涙となりしなり。其人生と天然とは、感情の屈曲を過ぎたるの人生天然なりき、其の客觀的大詩人を出す能はざりしは此が爲なり。其の末流形式的に無常觀に浸たされし者に至りては論なし。

源平鎌倉時代に至りては風趣一轉したり。此時代の詩人は誠に大なる人生の轉變を目擊したり、又實に深く人生に對して眞摯の運命を經歷したり、即彼等は身自ら人生の危機に立ちしなり。其敘事詩は客觀的に人生を歌はんとし、其散文詩は人間の小宇宙を詠出したり。然れども天台佛教の感化浸潤は容易に去り難く、其多くは幸福主義的に人生感情の域を脱せざりき、大なる客觀的詩人は其間に求め難し。

支那の雄渾なる山川と、南方清楚の風に養はれたる禪風は、足利時代の詩人を人事の外に遊ばしめたり。柳綠花紅、彼等は天然の歌詠者と

なり、萬法一心の天地を觀じたり。然れども彼等の思想風は微妙なる人生と、之に對する多趣の天然を詠ずるには餘り超絶的なりき、彼等も亦詢に客觀詩人と稱する能はず。

德川時代に入りては、文學は多く人生を歌ひたり。然れども其人生なる者は云はゞ人事なりき。其範圍は殆ど市井の外に出づる能はざりき。獨り芭蕉あり大に大宇宙を歌ひて德川文學に異彩を放ちたり。吾人は彼に許すに大小宇宙圓融を以てするも、其大なる事に於て彼に許すにゲーテを以てする能はざるや論なし。

之を概するに、我過去の文學は人生と天然とに於て圓融自在の境に遊ぶに至らざりしなり。特に大宇宙的觀想に乏しかりしなり。佛教の感化として甚深の悲哀觀を歌ふ者はありながら、其の圓熟十分に人生を捕捉する能はざりしは、其の天然に遠かりしが爲なり。源語の如き彼程の大作にして其の如何に天然に遠きを見よ。僅に前栽庭園の天然にあらずんば、漸くにして木幡山、宇治川の天然のみ。

宇宙の深大に接せずんば、奚ぞ天地の崇高を觀ずるを得んや。崇高に缺く、又何ぞ人生の悲壯に闖入するの祕鑰を得んや。我過去文學の偉大ならざるは此が爲のみ。

(三)

我文學は天然を大觀せず、是れ其缺點なり。明治の文學亦其祖先の子たるに背かず。明治の文人は人生に疎なるにあらず、而も客觀的詩人の能く深く人生を畫く者なし。蓋し彼等に大宇宙的觀想の根柢なければなり。既に側面の人生に滿足し、偏に小宇宙の內に彷徨す、其人生は斷片偏面の人生に過ぎず。我文學に道念の乏しきが如き、又は作家の眼光が作家自身の境遇を出てざる、又は詩想に高大なる哲理的根柢を缺くといふが如き、此等の批評を受くべき缺點は、皆其餘りに小宇宙的なるが爲なり。我文士が人生に對する注意着目の足らざるにあらず、其大宇宙的根柢が缺けたるは彼等をして殆ど盡く單に主觀的詩人たらしむる所以なり。

此缺點を矯め、將來の大文學に備へん爲には大に天然を絕叫せざるべからず、吾人戀愛に於ても大なる戀愛を我文學に要求し、滑稽に於ても大なる滑稽を要求するも、亦此と意義を同じうす。我詩人は何故に大宇宙の神祕的戀愛に着目せざるや。

世願くは誤解する事勿れ。吾等は天然を絕叫すとて、徒に山川を詠じ草木に情を寄するのみをいふにあらず。花袋が多く天然の風景を叙し、麗水が行を紀して大澤森林を筆にするが如きを以て、大詩人の能事となす者にあらず。天然其物の爲に天然を云々するにあらず、人間の世界としての大天地に親炙入神し、以て眞に大宇宙の寫象たる小宇宙を抽出せよといふにあり、

Statt der lebendigen Natur,
Da Gott die Menschen schuf hinein,
Umgiebt in Rauch und Moder nur
Dich Thiergeripp' und Todtenbein.

と。是れ人生の大歌詠者たるゲーテがファウストをして人の局限を嘆ぜしめたる所の者なり。明治の詩人よ、何ぞ生ける天地の大を我が有とせざる。

（廿九年十二月）

現代社會と諷刺文字

（一）

現時の社會は一の諷刺文字を要せざるか。假令文學は高妙の理想界に其本領を有するも、文學は又國民と時代の子たるを失はず。假令小說詩歌は國民の教育を本務とせざるも、抑又多くの矛盾を有する時代には、多くの諷刺文字出て來るべきは理勢の自然にあらずや。我現時の社會は洵に矛盾衝突充滿せる社會なり。否我社會のみならず、十九世紀の末葉は、實に撞着支梧の現象に富みたる時代にてあるなり。

一方に於て物理自然の解剖微を極め細を盡くせるに、一方にては電雷をも花月をも人の如く靈ある者として詠ずるの詩人得々たり。近頃電氣の美術的表象を如何にすべきやとの說ありしも、此般の撞着より意識し來りし者なり。又エマーソンが韻文の末路を道破せしも、此間の消息を漏らす者にあらずや。此の如き時勢文化の撞着は、既に近世萬有學の開け初めし十八世紀末より、處々に諷刺文字を喚び起しぬ。スキフトが人を造る機械を計畫する敎授を畫きしも此なり、又ファウストの說話の如きも、或る意味にては此撞着を叙白せし者として、現代の描寫に移し得べきなり。是れ現代の一端なり。

翻て特に我國を見れば、多く諷刺を要する者を見る、戰勝の餘榮には銳氣勃々たりしも、一旦の挫屈には臥薪嘗膽の聲も力なげに、殆ど痲痺中毒の狀態を呈して呻吟咽嗟の間にあるなり。坪內氏が曾て戰後の我國を一箇人にせば如何なる性格なるべきかとの問を出せしが如きは、此奇觀に對する一大諷刺文字を要求するの聲にてはあらざるか。

其他政黨の爭を見よ、宗教家の狂奔、上流社會の腐敗、下層の妖教沈溺、學生の無氣力、家庭に於ける古風と新風との衝突、教師僧侶の敗德、在留外國人と下層人民との關係、藝妓賣女等の紳士俳優に對する關係、妾宅、待合の內面、相場社會の內幕、新華族、紳商等の狀態、殆ど枚擧するに遑あらざる社會現象は矛盾撞着笑ふべくして、而も悲むべき者のみにあらずや。而して此間諷刺文字の出づる少きは何の故ぞ。文士作家の此豐富なる材料を目前に看過するは抑も何の意ぞ。吾人は現代の多く諷刺文字を要し、又生出するの時なるを信ずるを以て、大に作家の着目を喚起し、特に諷刺家の資ある露伴、諷刺の試作をなせし風葉等諸氏に向て、一掬の清涼劑を世人の渴に投ぜん事を冀ふ者なり。

(二)

サカレーが曾て富人の銀皿盛るに粗食を以てするを畫き、奢侈に對して諷刺嘲笑せしが如く、奢侈は大なる矛盾なり、故に又可笑なり。此可笑を種として、此人生社會の重要現象を詠ぜよ。現時の社會は此ユーモルの好材料に充滿せり。高利貸の老婆が貧民の血を絞り來りて、之を生白き醫學書生に注ぎ込み、蕩藥を盡せる痴態も惡むべき奢侈ならん。當世紳士が美姫に圍繞せられて金銀を蒔き散らしながら、濕底の空虛に醜躰を顯はす周章の狀も笑ふべき奢侈の矛盾ならん。交際社會の虛飾、書生の盛裝、滅金の金鎖、綿入の艶衣、何れか慨すべき可笑ならざらん。世は先に頻にユーモル文字を要求したる事ありき、作者亦之を試みたる者なきにあらず。而して今や世の道德は退きて、主我自利盛に、國民の富は著しく增殖せずして、奢侈は甚しく昂進せんとす。此現象を捕へて可笑の文字を作り、可笑嬉笑の間に眞摯なる教訓を國民に傳へんと欲せば、今の社會は競て之が材料を給供し、而して悲慘悲哀に飽きたる讀者は之を歡迎せん。今の文壇に一サカレーなきか。

(三十年二月)

精靈教

精靈教とは万人万象皆同一精靈の分化なるを信じて、博慈同情の心を本とし人道德義の光明に依りて、淨土樂園を此土に下すべきを教ふる宗教なり。其の大本は基督教の贖罪救濟の教と吠檀多若くは佛教の万有一躰の教とに立ち、其名は神と基督より一歩を進めて精靈を主義とするに出づ、即佛教の言を以て云はゞ佛性教といふに同じ。此一派同盟の起りしは獨逸と墺地利にあり、其傾向神祕的に傾く所なきにあらず、其一部分は內祕的基督教(Esoterisches Christenthum)と稱する者あり、其一部分には或は印度の神智學に同情を寄する者なきにあらず。然れども此派は博く人道を目的とするが故に決して教規宗儀を立てず、其運動は雜誌書籍若くは慈善事業に依り、稍內面祕密を主とするの傾向なきにあらず。ミュンヘンの心理學會、ロンドンの內祕基督教同盟の如き此派の流に屬すと雖も、彼等は直接表面に傳道する事をなさず。信者を得る事其目的にあらずして其旨意を万民の精靈に吹き込むにあればなり。然れども此派に同情を表する者今や歐米到る處に發見すべく、彼等は互に精靈精神の交通結合あるを信じ、又派外の人と

雖も終には此內祕微妙の結合に入るべしと確信せり。我師ケーベル先生亦此流派に關係を有し余に其の同盟の旨意書を與へられしを以て茲に譯出す。此檄文亦現今我邦宗教の時弊に光明を與ふる事なきにあらざるべし。其精神の如き苟も眞摯道を愛する者の首肯する所ならん。原文は森殿の調を備へ熱意人を射る者あり、譯文は其一字一句をも取捨せずと雖も、只其氣力と、熱意を傳ふるに足らざるを如何にせん。

精靈教萬國同盟結合の檄。

宇內の眞理と人道とを愛する人に告ぐ

高尙の感想を有する人は、疑惑と無信との不安落寞を脫して、精神と心情とを滿足せしむべき道德的世界觀を憧憬すること、沙漠にありて渴に苦む者の滾々たる淸泉に向て走るが如き者あらん。

余輩は知る、貴賤僧俗を問はず、苟も高尙の心を有する者は、甘じて敗餘に殘存せる信仰形式の賤むべき羈絆に服せず、必ずや翹足眞理の光明が輝かん日を望みて動かざるを。何となれば今の時、眞理の聲は

潜みて、人の之が神聖なる救濟の福音を傳へんとする者なし。絶智主義既に巨蟒の頭を擧げて其毒焔を吐かざるも、其毒氣は細蛇の如く潜行して眞理の聲を屏蟄せしめんとし、詐僞は無慚にも盛裝横行して其巨大の領域を擴張せんとす。

思想家が互に吳越徑庭せる持論を抱きながら、同じく古來の信仰の形式を保持するは、一に彼等が此形式を以て公共の秩序を維持するに必要なりと想へるに依るのみ、是れ公然の祕密に非ずや。古風の夢想は、星辰無限に羅列せる此宇宙の間、天にも地にも到底容れらるべき餘地を有せず、是れ公然の祕密に非すや。社會の嚮導者たる人々にして、欺騙民衆を愚にし此に依りて其教權を保持せんとし、公然自ら是なりとするが如き、宗教を政治の不義なる機關と汚辱せんとするが如き、詐僞の泥澤に社會的秩序の基礎を建設せんとするが如き、又他くなき獨尊の心と限なき殘忍の迷像とを本尊とし、之に依りて道德を維持せんとするが如き、何れか吾人の最も赤面恥愧すべき事にあらざる。今の

世に古來の形式を無心に信奉する人々が證憑とする處、吾人は之を敬せざるに非ず、而も此等の人々は社會の先導者として勢をなすに足らざるを信ず。

而も尙、限なき自利と自尊の夢想も、自ら爲に謀らず我を棄てゝ、人生の煩悶と其荆棘を負はん極美の慈愛に對しては、沒滅するの外なからん、責罰を受けて懊惱せる無數の同胞は棄てゝ顧みず、自ら高處に超然として自家の惰眠を貪り娛樂に耽るが如き華胥の夢界は、人生の苦戰健鬪の中に碎勵精神を高尙に淸淨にせんとし、且無涯の慈眼を以て世の罪惡を愍まん慈悲心の莊偉なるに比せば、將に顏色なからん。古信仰の表號や、表號としては誠に詩的韻致を有し、又神聖なりといはざるべからず、而も高尙の思想を有する者は、文字的解釋に甘んずべきにあらず。限なき自利心と飽くなき殘忍との怪物は、之を神位として崇拜せる昏迷せる者及墮落せる者を捕へて、之に地獄の苦責を與へんとす、其怖るべきは全身火なるモロホの怖るべきも及ぶべからず、此怪物と

現時の道德心と兩立し難きは誠にサトルンの非行、ユピテルが戀の爲になせし狂行が新興の耶蘇敎と相容れざりしよりも大なり。而も、幾億の民は口舌の上にのみ其敎を容認し、僧侶は其信仰の互に特なるを外にし、心情少しも之を信ぜずして徒に此敎を說けり。

人生不羈を襲ふ。然れども功利の心、屈從の情を偶像として其前に跪く世界に、自由といふ、豈空花畫餅に終らざらんや。

宗敎の上には平等無差別を說く人も、他を屈服せん事を冀ひ、害惡の因何れにあるかを知らざるなり。人類は博愛と同胞共和に依りて高尙なる進步的の社會を形成せんと勉む。而も地上天空に自利をのみ尊崇し、神的慈悲、博愛等の語は徒に虛飾僞善の用をなすに過ぎず、自利の迷像と博愛とを混じ、名利心と獻身とを亂り同時に基督と惡魔とに事へんとするが如き世界に、如何にして此崇高の目的を現實にするを得ん。道德を說くも如何にして此般の基礎に眞正の道德を建つるを得ん。根底たる眞摯なくして如何にして道德を實行するを得んや。

虛僞は人類を擧げて不德に化し、道德の基礎を顚覆し、上よりは「貧者に負はしむるに耐え難きの重荷を以てして自己は指だに之に觸れざる」如き極醜の情慾と放逸の娛樂とを以てし、下よりは卑むべき憎惡、嫉妬の情を解放し墮梁せしめ、以て人文の貴ぶべき美果を殄滅せんとする最も恐るべき慘局を催促するを見ずや。此時若し眞理の神聖なる光明が人類を普曜する事あらんには、社會的關係は忽にして面目を革新するを得ん。

余輩は彼泥澤に沈溺し了らんか、將晃燦たる天上に到達せんと勉むべきか。余輩は一切世間の光明界を欲する人に檄するなり。余輩は一も敎理宗義の制規をなさず、精靈敎の万國同盟を作らんと欲す。余輩は一切の聖典が含有する精神的深意を容認す、就中概して福音書と聖書とを容れ、又印度、波斯其他文明國の聖典を容る、余輩は文學美術の大作中に盡く神的啓示の存するを見る。余輩の建設せんとするは宗派にあらざるが故に、何人にも其持論を棄てよとは云はず、余輩が宣布

せんとするは精靈の宗教なり、眞理の宗教なり、一切諸人心靈中の祕奥なり、一切宗教の埋伏未た顯れざる心髓なり。余輩の拜する神位は精靈の朗日なり、万有の本躰なり、萬有の中に自己を沒了し、而も常に其中より不可說の莊麗光明を發し、一切の實物特に人類中に眩耀する本躰なり。諸物の元平等一味なるを知り、此最高の自覺を明にせば、一切の有限と差別は、星光が太陽の內に消え、水滴が太洋に沒せんが如くに消滅し去らん。此故に吾人が拜する神位は此世界の主宰に非ず、獨宰の君主に非ず、一切万物の不羈自由なり、一切万物の親愛共和なり、一切に超え、一切に存する愛情なり、一切を透徹し、一切を自己に攝取する活ける理想なり、此故に又惡毒を解除し蒙迷を啓く驅暗なり、一人をも失はしめざらんと念ひて斷ゆる事なき良牧者なり、醫師なり、此神位は何人をも判せず、而も惡は永劫其驚歎すべき裁定を免るゝ事なし。

是れ人の中に存し人の中に彷徨するイスラエル人の神位なり、是れ佛陀が依て以て一切の中に沒したる無限の慈悲同情なり、是れマホ

メットの心中に發現したる樂園の淸淨光明なり、是れ一切人類の心中に充滿し、福音書中基督が暗々裏に使徒に傳へたる心內天國の內祕にして、余輩が明に世に宣布せんとする所なり、是れ一切の人を輝かせる心內の基督なり。

吾人の心中には諸の星辰を越えて變るなき無限の思想躍動せり、吾人の心中には一切の人たる者を結合せる彼の愛情の脈搏皷動せり。此故に何れの人も皆神的の本躰なり、無始無終常住不變に發して精神ある個人の中に存する神位なる太陽の一光線なり。何となれば樂園は何れの心にも潛伏せり、墮落の極にある者と雖も之を有せざるはなし、吾人は只之を覺醒するあるのみ。精神的なる者は其個性其思想の中に天地を包括したる者なり、一切の精神と合一したる愛の生命なり。心靈の生命を己が愛する精靈の深淵に投じたる者は、亦之を失はず永く其生を保たん、故に吾人は吾永生を此精神の活命を保つべき基礎の上に觀じ、又吾人と精神的に近親なる人々の團欒の中に之を觀ず。永

生とは此に外ならず吾人は今既に愛情の中に永生を有す、躰制は幾度か組織を解くも愛情の範圍には此生永く盡きざらん、而してこの躰制なる者は有限の形躰中に天國的愛情の原態を表し、人の精神として天國の光明を反映せる者なり。

眞理の爲には進で制規の下に立たん崇高なる勇氣ある人、此等の人は余輩と共に行かん。

無限の慈悲を垂れて世の憂苦と罪惡とを救はんとする人、此等の人は余輩と共に行かん。

自ら犧牲となりて其兄弟姉妹の福祉と子孫後昏の幸福光明を畫策し、己を照らさん樂園の光明を此光明の中に觀んとする人、此等の人は余輩と共に行かん。

然れども自利と屈從の心に激せられて唯自己の幸運のみ求むる者、僞善唯自ら愛し而も自己の人格を全くするを知らず、徒に虛飾を張り、滔々たる敗德の醜骸を蔽ふに一時の彩色を塗抹し、以て諸惡毒の根を

保護せんとする者及、ピラートの如く、傲然眞理と人道の最も貴ぶべき大義を輕んずるの風をなし、以て自家の怯懦弱行を蔽はんとする者、此等の人は余輩に遠からん。

余輩は反復して告ぐ、憂苦に惱み煩悶を悲む人は、只世界を救はん眞理のみ之に安立と自由を與ふるを得んと。

此同盟に加盟せん諸君は、始には其數少なかるべきも、諸君は世界の活ける良心たらん、詐僞と敗德に陷れる人類を警醒して眞理の聖言を傳へん聲たらん、其聲は常に力を得て膨脹し宇内勸善懲惡の警鼓とならん、諸君の力は微弱なるが如きも、諸君は千歲の燈明となり、爾曹は地の鹽なり、爾曹は世の光なり」との使命は再ひ諸君の上に來らん。

此同盟に加盟せん諸君の胸中には神聖なる、人類の中に最も偉大なる思想住せん。此思想の光明を以て世を照し、一切の人に彼等が天國の門戸を開く。

諸君は悉く神位なる太陽の同一源より發せる光線なり、活ける慈悲に依りて天地を包括する諸君の精神は、大さ宇宙に同じく大なる一切に等し、是れ只諸君の神的本躰が發現せる者に外ならざればなり。

諸君は自己の外に服すべきの法を有せず、諸君自己即法なり。諸君は何れの人にも其本然同一の形態中には固有の神位本躰、同一光明の光、同一神格の神位存するを認めん、人々を神聖にする者は即諸君が本躰の神聖なり、人々を啓明する者は即諸君が自家精神の明なり、人々を蒙蔽する者は即諸君自己の神的本躰の蒙なり。是れ即天國の復れるなり、是れ即天國の鎖鑰なり、是れ即外面より壓制して人の品格を汚辱し諸君を奴隷賤夫と見る法規制裁の一切の束縛より脫離するなり。是を會悟し得ん人の心中には僞高輝かん、一切世界の貴高は此僞高に比せば顏色なからんのみ。

余輩は一切外部の縛繫を棄てたるが故に、何人をも外部より制裁せず。諸君が善をなさんには、奴隷的感想の人々の如く躊躇逡巡する事

なく、自ら重んじ、自ら明にして、後に來らん人類の中に天國を降すに備へ、彼等の間に諸君が永生の曙光を望め。神聖の事物を增進したる人は億兆と万年を照さん。

此思想は諸君が崇高なる事業にして、又諸君を醫せん石膏なり、此石膏や人類救濟の進行中諸君をして煩悶と生死を超えしめ、諸君が今既に古郷と見し慈悲の天國中に生れしめん。同志を結合し而も何れの人をも拒まざる範圍の內に諸君は互に同胞の情を以て結合せよ。終には世界に炎燄を漲さん聖火を今は靜に家より家に傳へよ、已むを得ざるに當りては、滔々たる詐僞の勢力に伴はれて公然制規に服すべし。

我が同盟は此故に黨規束縛を立つる黨與に非す。我同盟は自家本躰を直覺せんと覺醒し、精神的に不羈なる人々の精神的結合なり。我同盟は眞理の此普遍なる證明を作るに外ならず。此に對して敵視反抗せん者は眞理愛護の證明に反對するに外ならず。

吾人が此證明の爲に疾呼し、又吾人が宣布の文書の爲に又時々公會

を開き其他之に類する目的の爲我同盟の議に依りて、神聖なる事業の爲に有志の義捐を募るも皆此等神的不羈なる人々に一大共同運動の機會を與へんが爲のみ。

（三十年一月）

餘裕と宗教

或人のいひけん如く、靜肅安穩に良心を練磨し考察を鍛錬すべきは過去の事となりぬ。所謂十九世紀の文明は、世波抑揚常に生存競爭の怒濤を何れの人の周邊にも寄せ來り、一日も安穩に、一時も沈靜に、日常必要以上の事物に心を寄するの暇なからしめ、商も工も將た學者も政治家も思を閑題目に馳するの餘裕なきが如し。其極は最も餘裕の自由に出づべき文學も社會的となり、最も有形を離れて心靈界を支配すべき宗教家も其事業の大半を社會事業に奪はれんとす。

競爭は進歩の要契なり、多事は改良の動機なり。吾人は、決して或一部の退縮的隱者の如くに、十九世紀の文明を咒詛する者にあらず。狂瀾怒濤は人生の眞面目と眞價値とを發揮し、其眞品性を鑄冶せん。さりながら人は有限の機躰なり、凡ての機關は休息なしには破損を招かん。特に人の心性は餘裕を要求して止まざる者なり、人心は必需切迫

の事にのみ働けば、終には其必要に應ずるの働きをなすの力をも失ふに至るを常とす。多事の活動をなす者は、其の多事多忙に應ずる丈の心靈的基礎なくんばあらず。此に於て、人は實務以外に自由餘裕を要求して止まず。此要求は發して美術となり、小說となり、或は花に戲れ、月にあくがれ、水の中に、陸の上に何事か遊戲をなさんとす。而も此閑遊自由の滋養は、即人をして其實利多忙の生命に應ぜしむるの養源なるを知りて、勉めて心靈の養源となるべき閑戲を擇べる人果して幾何かある。或は酒に溺れ、色に耽り、妓に戲れ牌を弄して、此餘裕の要求を充たさんとする者、世界て皆此に、して、特に一國の元氣精英となるべき、政治、商業界の人は、主として此の如き有害惡德の遊戲に耽る者比々皆然り。

此等の惡德遊戲に代えて、美術文學の推薦すべきは吾人の喋々を待たず。只此上に吾人が此等の人々に勸めんとする所は、有爲繁忙の人々が其餘裕の要求を、一層高遠に一層心靈的なる者に依りて充たすの

方法を講ぜん事にして、而して吾人は宗教を以て之が好方便と推薦するに躊躇せず。宗教の聖典を玩味するも可なり、高僧に參して其教を聞くも可なり、若くは靜肅なる寺院に詣し、香を燒き眼を閉ざして靜に冥想するも可なり。

吾人が宗教の心髓と信ずる所は今直に此等の人々に向て說くを要せじ。而も尙宗教的題目に心を潛むる人あらんか、世界に關する祕奧、人生命運の疑問は簇々として生じ來らん。吾人は亦多事なる十九世紀の事務家に一々此等の疑問を闡明解釋せよとはいはず、又必しも一宗一派の敎ふる所に從て、此解釋に定說を抱くを强ひず。而も尙此等實務の人にして一度此疑問を提起して、徐に靜に之を玩味するに至れば、庶幾は百忙中一箇の閑方面を得、所謂靜肅なる眞心思考の鍛錬は此處より生じ、德性を養ひ品性を練るを得て、難關繁忙亦之を裁斷するの難きを減じ來らん。活動は餘裕の養源より出づべければなり。

摯實なるグラッドストーンは、何に依りて多事の政局に當りしか。剛

数なるビスマルクは、何の養源に依りて、多難の帝國を一轉して泰山の安きに置きしか。此等の人々は必しも教會の信者にあらず、而も上帝の一信仰が其事業の大源泉となりしと告白するは、決して其政畧の虚託にあらざるなり。之を今の我國にしては、渡邊國武、島田三郎の人々が、多少他の切々たる政治家と面目を異にするは、其心靈的餘裕に因るにあらずや。

謂ふ勿れ、多事他を顧るに遑なしと、激烈なる競爭場裏に聘馳せんとする人は、其れ丈の心靈的修養と餘裕なくんばあらず。幾百の聖典は甘泉滾々盡きざるの深味を貯へて汝の前にあり。今日或は就て教を乞ふべきの高德淨土甚だ多からざるべしと雖も、幾多の境内清閑にして塵事を絶するの淨刹は都鄙至る所にあり。牌を弄するの時を割愛して、試に法句經、福音書を繙け、或は外國語を能くする人は吠陀、アヴェスタをも讀め。塵事に熱殺せられたる腦髓は此に依て新涼を呼吸するの思あらん。夏時冬期旗亭旅館に豪奢を極むるの間、暫く去て禪菴佛

寺に靜坐せよ、心靈の奥は今迄自己にも語らざりしの幽趣を語り來りて惜まざるべし。

茶も可なり、花も可なり、謠曲音樂乃至繪畫、寫眞、遊獵、讀書尚可なり。然れども沈思せよ、宗教を味へ。人心宇宙の祕奥は、如何に實務惱殺の人を活かし來るべきか、此間に養はれし新鮮の涼氣は個人にとりて幾何の利あるべきか。況や一國一社會の主腦たる有爲の人々にして常に此心懸けあらんか、國家社會の元氣は如何に揚り來らんか。

吾人の言を以て我田引水となす勿れ。今日政治界實業界の形而下的物質的惡潮滔々たる下に、確に政治家實業家の一部に此種の傾向を呈しつゝある少數の人あるは吾人の認むる所なり。富豪乃至投機商にして幾何かづゝ形而上の事に注意する者を生じ、或は圖書館、貧民學校を建設せんとする者あるが如き、豈此間の消息を漏す者ならざらんや。天下社會の趨勢は、永く實務家をして實務以外に何等の良心なき人として止む能はざらしめん、生存競爭は心靈的源泉の確實鞏固なる

人に左袒して、此修養なく餘裕なき人を倒さん。今日實利と不德の遊戯に蠢々たる人々豈猛省せざるべけんや。

然れども誤解する勿れ。吾人は宗教を以て實務家の玩具に止まらしめんとするにあらず。宗教は眞摯なる人生の高遠なる指導なり、遊戯閑事にあらず。然れども其の高遠なるだけ又有力なるだけ、眼前の實利以外に大なる餘裕に依りて之に入るを得べし。實務家よ、試に其餘裕を此間に注ぎて此高遠の指導に接せよ。（卅年十一月）

信仰の一貫と信仰の多面

Vigorous assertions are characterestics of youth.（一轍なる斷定は青年の特質なり）とは何人の知言ぞや。此は眞なり、此にあらざる者は皆僞なり、我説は是なり、此以外は皆非なり、と斷定して自ら定説確信あるが如く信

じて、他を罵倒するは、實に未た思索と眞理探求の奥に達せず、僅に論理書一卷を閲讀して天下の眞理此外になしとする青年血氣の致す所なり。特に信仰の問題は單簡一命題の決して盡す所にあらず。一貫の信仰ありて深く微妙の味を解するに至れば、其れだけ何物にも眞理妙諦の潜伏せるを發見せん。醜悪なる蛙の頭にもゼムあり、況や同じく人心に宿れるの信仰に於てをや。言説は思想の具なりと雖も、言説は必しも一切の蘊奥を盡さず。人の信仰は一方にては言説的なると共に又直觀あり、否却て此直觀は人々安心の依て立つ潜在的根底なり。然るを信仰安立の問題を論ずるに當りて、其言説命題の末に依りて一轍の斷定を以て、彼を非とし己を是とするが如きは、自らにも一貫の信仰ある者にあらずして、自ら言説の奴隷たる者なり。

信仰一貫せる者は信仰鞏固にして深遠なり。此鞏固と深遠を以て錯雜せる人生を觀じ、又他の眞摯なる信仰を批判す。物として己に融解し事として自ら會心せざるなし。此を以て、一貫の信仰は多方面なる

の觀あり、多方面なりと雖も自ら守るなきの折衷混和にあらず、自ら一貫する所ある包容融和なり。包容とは恬澹にあらず、又排斥と一轍の斷定とは決して一貫の信仰に出づるにあらず。

排斥一轍は青年の稚氣に出づ。然れども青年も思慮練達して一貫の信仰あるに至れば、偉大なる精神の存在を發揮し來らん。今日の信仰思想界尙青年の稚態を呈す、然れども其が壯年の精神に達するの日は、遠きにあらじ、之を先導する先覺の責決して少小にあらず。

(卅年十一月)

佛教方便の觀念

政治家政略の奴隸となりて政治の大本終に立たず、宗教家方便の觀念を抱きて、教化の大事終に行はれず。

是れ幾多失敗の歷史が擧て證明する所なり、眞摯の教化は徹頭徹尾眞摯にして、一點の詐僞一點の策略あるべからず。一點の策略なく短刀直に眞摯の教化を施す、是に於てか眞心の熱情信仰始めて人の肺肝に入り人の心情を融化するを得。古より信仰を宣傳し、教化を宣流する人のなす所、皆此眞摯の一點に外ならず。釋迦は菩提樹下悟得の四諦眞理を以て直に鹿野苑裏の比丘に說きしが故に、五比丘は直に化せられたり。モハンメッドは其天使に聞きし所を以て、直に其妻を誘化して、終にメデナの市民を化したり。

然るに何事ぞ、近頃の宗教家方便を口實とし策略是れ事とし、策略を以て人を化せんとするが故に、人亦策略を以て之に對し、紛々人は歸向を失して安立の途に迷ひ、擾々教界は爭鬪利慾を事として人をして信仰界の前途如何に惑はしむ。而して方便策略の觀念多き者今日佛者を以て最となす。佛僧の多くは共に語るに足らざる、否共に齒するを快とせざる者のみ。其少數の相語るに足る者亦曰く、我に深遠の眞理

あり、然れども末法凡愚の入り難きを如何にせん、須く善巧方便を以て人を化せんと。彼等が公開と内祕とを判別するの甚しきは、常に他人を目して門外漢共に佛陀の大眞理を語るべからずとなす。然れども彼等が深遠の眞理となす所は眞に彼等の信仰了解する所なるか、否、只一片の相承文字を得て、徒に其理を高遠なりと空想するのみ。試に今日の佛僧に果して眞に華嚴の事々無礙の教に依りて悟得安立を得しあるかを見よ。彼等の上々なる者も多くは死文字の了知を抱けるのみ。嗚呼釋迦は果して華嚴の眞理を内に祕して僅に四諦の眞理を鹿野苑に宣説せしか。然らば何ぞ彼の言の浮華にして、此四諦の摯實可憫なる。思ふに今日の佛者をして方便の觀念に支配せられ、内に信仰なくして外徒に善巧方便を説き、人をしてうそ方便といはしむるに至りし最大の因由は、天台の五時教判にあり。天台は方等を方便とし、般若を方便とし、獨り法華を以て四十餘未顯眞實後の眞實なりとせり、爾來佛者常に方便を唱へて方便の觀念に失配せられ、今日の如きは此

觀念の爲に全く其教運を殺し去らんとす。試に思へ釋迦は菩提樹下に自ら覺者佛陀なりとの信仰を得、而も四十年の間眞實に自己の熱情を吐露せず、人を方便説法の中に彷徨せしめ、而も佛陀なりと自らも許し人にも稱せしめたりとすれば、彼は異常の冷血なる詐僞者のみ、僞善者のみ。佛徒をして教祖を見る事此の如くならしめたる天台は、實に佛陀の大罪人にして、又民衆の誤導者なりといはざるべからず。

佛教は天台の五時教判、眞言の顯密判釋の爲に終に煩瑣文字の奴隷となり、衷心信仰なき、うそ方便の詐僞者となれり。乞ふ吾人の言の餘に激烈なるを責むる勿れ、眞に佛陀の精神を思ふ者は如何にして今の方便佛者たるを得ん。小説家露伴先に「毒朱唇」を作りて佛陀の眞摯なる信仰と精神とを歌ひぬ。佛者はうそ方便の奴隷となり、彼等の所謂門外漢は却て佛陀の精神を道破す、佛教の衰ふる洵に故なきにあらず。昔はジェスイト派「目的は方便を正しくす」と説きて、如何なる方便をも嫌はざりき、此を以て一時の盛運は人心の混沌と共に南柯の一夢となり、

新世紀の文明は、今や諸の方面より眞摯なる信仰の運動を見んとす。佛者は此般鑑に鑑み、又深く敎祖の精神を思ひて、早く其方便の觀念を捨てざるべからず。

然れども、うそ方便の外に、眞の信仰が消え失せたる今日の佛敎は果して、此唯一殘存の擬寶を捨つるを得るか。佛敎の青年にして將來の革新を志とする者、大に此間の覺悟なかるべからず。

（卅一年一月）

社會に於ける佛敎と基督敎と

基督敎は實力なりとは、基督敎國の豫言的詩人の屢唱道したる所にして、又萬人の認むる所なり。其實力の現はるゝには、或は思想界に於て哲學者倫理學者に影響し、或は美術的製作に、或は詩文に、乃至政治上

の關係、經濟の動搖、社會の大勢に實力の現はれざる所なし。然れども、是れ等は特に基督敎をして獨り其社會的勢力の大なるを誇稱せしむるに足る者にあらず。何となれば儒敎にありても、回敎にても、佛にても宏大なる組織を以て國民を感化し來りし者は、此種の實力とならざる者なく、歐洲の學者が基督敎の本質は神學にあらずして實力なりといへば、我も亦佛敎の本體は宗義宗乘の論にあらずして實力なりといひ得べく、而して其實力は佛敎國特に我國の思想界、藝術界乃至政治、社會に、彼と同量に現れざるなきなり。此點に於ては、吾人は佛敎と基督敎とに根本の差異優劣ありとなすを否定せんのみ。

然れども二敎の實力即社會的勢力に就きては、輕々看過すべからざる差異の存するあり。何ぞや、其根底の深淺是れなり。基督敎の實力は其發表の表面大なるも、歸する所は家庭の感化に出てず。基督敎の德風は家庭團欒親子親和の間を薫じて、其香氣は馥郁として社會の表面に發す。幼兒が慈母の懷にありてバンヤンがピルグリメージを開

き、嚴父の膝下に跪きては山上の訓誡に接し、而して此等の薫陶を統ぶるに基督の神人的人格を以てす。此を以て其源泉永く盡きず、其薫風亦永く基督の人格的感化を離れず。此に於て其より出づる所の宗教は神學を本體とせず、儀式を尊とせず、人心の奥底に浸潤して、拔くべからざる靈火を以て其實力を本質となす。

然るに、他方に於て我國の佛教を見よ。佛教は始よりして佛像經卷の佛教として我邦に入り來り、朝廷權臣の歸依に依りて、一國の勢力となり、國土安穩若くは疫病退治の祈禱の爲の故に、國分寺の建立等に依りて國内に蔓延したり。其始よりして既に印度の原始佛教の如くに、佛陀の人格的感化を離れ、未來世祈禱の功力に依りて民心を得たり。後世淨土門起りて弘く下層の人民をも感化するに及びても、其方法は切々孜々日常の德行に於て之を薫陶するよりは、寧ろ朝暮の勤行、死者の追祭若くは繰珠唱名に依りて「所謂後生の一大事」に懸念するを以てしたり。此を以て一家は朝暮の勤行に於て相集り合誦讀經するも、其

は家庭的團欒にあらずして、宗教的公共儀禮の性質を有し、其經文は如何に高尚の哲理なるも道德に切實なるも、ニョゼガモン乃至サライニコの外國語のみ。其他にありては本山參拜、說法聽聞の行事のみ、最も人心に浸潤し、人をして一生磨し去るべからざる感化を受けしむべき家庭内の感化力に至りては、甚だしく缺乏せり。其勢力の根底が政治的と來世祈禱とに存するは、實に佛教の大弱點なり。

二教既に其實力の根底を異にす。其結果の現はるゝ所指を屈するに遑あらずと雖も、其の最も見易き者を擧ぐれば、彼には基督教的家庭あるも此には佛教的家庭なる特色甚少し。此を以て歐洲にては如何なるフリーシンカーにても、其幼時の印象を止めて敬虔の風あり。彼のゲーテが書きし、オステルの朝に於けるファウストは其好標本なり。然れども佛教にありては此薫陶なきが爲に、教者なる兩親に育てられし兒童は、只傳來の宗旨として檀那寺の信徒として夢死するにあらずんば、佛教否敬虔の宗教態を痴として棄て了る者のみ。今の青年は多

くば此後者に屬するを見よ。彼れの實力は家庭の吹き込みに依りて心底に浸潤したるパエテーなり、此にありては其根底「後生大事」なる說法の信條約空文なり。佛者の所謂安心とは敎條を信受したるの謂なるにあらずや。

二者の此差別は如何にして生ぜしか、此差別は果して二敎の根本的差別に出でしか、將又基督と佛陀との感化は如何の別あるか。此等は今此に論ぜず、只二者は共に實力なるも、而も其根底に此の如き差異あるを見來れば、吾人は佛敎將來の運命を思ひ來て爲に長嘆息せんと欲するなり。佛者果して此別を承認して勇猛するの明あるか。

(三十一年六月)

日本人の宗敎的素質と其將來

日本人は宗敎的性質に乏しとは、吾も人も唱ふる所の常套語にして、此事實を根據として、我邦に宗敎を排斥せんとする者あり、其反對には宗敎の特に我邦に切實なるを唱ふる者あり。此の如き問題の決定は易々に斷じ去るべからずと雖も、日本一般の宗敎思想が高遠幽玄の趣を備へず、極て現世的の範圍に限られたる事は恐くは公平なる觀察者の一致する所ならん。國學者が日本神代の神々は人なりといひしは、偶然にも日本宗敎の特質、邦人の宗敎的素質に適中したるの言にして、日本の現世的宗敎は人間の崇拜を中心とし、祖先崇拜と英雄崇拜と相合したる者、常に人心感化の根底動力たりき。佛敎者は佛敎思想が多く日本の人心を感化風靡したるを說き、吾人も印度の幽玄なる思想は日本佛敎の高僧に依りて咀嚼同化せられたるを認むるも、而も佛敎が日本に入りて蒙古のシャマン佛敎、西域の占星佛敎と同一般、極めて現世化せられ、法身觀の談理は報身淨土の渴仰に打ち消され、大日說法の玄談は全く現世祈禱の方便となり了りし事實は、之を認めざるべからず。

少くとも一般人民の宗教が極めて現世的にして、其理想が甚しく一時的なるは蔽ふべからず。固より何れの國にありても、一般國民の思想信仰に高尚幽玄の談理を期すべからず。日本の宗教が人間現世的なりといふを以て、之を褒貶し、或は此特質に基きて我邦宗教の將來を揣摩せんとするが如きは輕率の至なり。然れども日本の宗教、道德は、何れの方面より見るも、人物崇拜的のプレチーなる性質あると共に、浮浪暫停にしてペテーなる事實は拒む能はず。大惡人もなかりし代りに大善人もなし、岩長姫、舟虫の如き者が惡女の標本にして、二千餘年の間一のジャンダーク現れず、時平が姦人の最にして菅相丞は其反對の極なり。俊寛の如く都をこがれて鬼界が島に終りし憐れの說はあれど、ワレンスタインの如く運命と鬪ひ戰て倒れし悲壯は稀なり。即大に迷ひ大に煩惱罪障に陷りし人なきと共に大に悟りし人もなし。迷て悟りし者文覺あり、運生坊あり、西行あり、長明ありと雖も、其迷も悟りも共に微小にして、一時の感動、壯年の不平は其動機、嘯風吟月或は念佛隱

接は其悟の結果なり。聖アウグスチンの大懺悔終に見るべからず、龍樹の大惡大悟八宗の祖となりしが如き者片影だになし。所謂名僧知識は多くあり、而も多くは大に迷ひ大に悟りし人にあらず、大抵皆孤兒となり寺院に入り、師に就き業成り、弟子を感化せしのみ。吾人は日本の宗教及道德の歷史を可憐淸淨として愛す、而も雄大崇高として之を尊ぶ能はず。

然れども翻て我邦宗教の盛大勃興の跡を見るに、現世的人間的宗教の國民にも、尙熱情勃興思想崛起の時はありき、多少大に悟り大に善に超絕の理想に動かされし時運はありき。疫病災異に遇ては大物主神を祭り、瘟疫の行はるゝに際して蕃神國神の爭をなせしが如きは事餘りに小にして幼稚なり。平安朝の大宮人が他かぬ現世の快樂に歡樂極つて悲哀多く、一向に無常轉變の福音に歸向せしは事浮薄に屬す。而も大に迷ひて大に悟るの片影は此中にも現れたり。奈良朝の佛教興隆は、三韓外交の失敗と近江朝庭の滅亡とを承けし時にあり。藤氏

の天理に背ける盛運衰へ、平氏の暴興幸運も束の間に消え失せし其時には、源平盛衰記、平語の幽遠なる叙事詩あり、淨土佛教も此時運と共に興りしを見る。其後禪道の流行、大平記の出現は、鎌倉、足利時代の罪惡に伴ひたりき。弘安の役に當りて一時國家的意識と共に宗教的意識の勃興せしも、亦著しき事實なりとす。元龜天正の間鬼は武士の理想にして、人の國を亡ぼし人の子を殺す者は好き弓取なりし時代に當りて、禪も其他の佛教も著しく活動なかりしは寧ろ奇とすべきも、ジエスイト教が一時人心を風靡したるは、大に迷ひし人の悟を求めし發表にはあらずや。

斯く觀じ來れば、無邪氣に可憐プレチー、ペテーなる日本の宗教道德史も、大に困り大に迷ひ大に罪を犯せし(勿論比較的に大に)後には、又大に安立を求め大に悟り大に懺悔せんとせし跡を示せるにはあらずや。之を近時の一問題たりし歴史畫題に見よ、「繼信最後」の平和寂滅の趣あり て崇高の風なきに反して、「延元帝御最後」が如何に(若し妙手に畫かれ

たらんには)悲壯幽玄なるべきかを思ひ、「後德大寺左大將」が一片秋愁の畫題なるに引き換へて、「大原御幸」が大に深奥の悲哀と安立とを現じ、一層進て、「戰後の檀の浦」が如何に宇宙的に心情を感動すべきかを思へば、日本の歴史、日本人の性質には、必しも大に迷ひ大に悟るの素因根底なしといふ能はざるを知るに足らん。否此の如き傾向若くは需要が、其歴史の時々に瞥見したる事此の如し。然らば日本人の宗教道德がプレチー、ペテーにして、宗教的幽趣に乏しといふは、所謂性格素質の必然的不變性にあらずして、實は其の境遇の然らしむる所、海中に孤立して激烈なる國際的經驗を經ず、國土富有に天然の恩惠多くして眞に深刻なる社會の辛慘を嘗めず、道德に於ても大に迷ひ大に犯すに至らず、思想信仰に於ても大に疑ひ大に求むるに至らざりし結果ならずとせんや。若しも之をして大に迷ひ大に疑はしめば、大信仰大豫言の其の間に出づるは期し難きにあらず。順世外道の極端なる物質主義なき處に、佛教の眞正の道行を求め、追放流離の經驗なき人民に猶太の豫言者

を望み、中世歐洲の暗黑なき國にダンテのインフェルノを見んと欲する能はずとすれば、我邦人が宗教的發達の貧しきを見て此性永く換ゆる能はずとするは、輕卒にして、又將來の時運を豫言指導するの道にあらず。

此に於て我邦宗教の將來に關する切實の問題あり。日本國民の境遇及其社會狀態は、永く其宗教及道德をして從來の如くプレチーにしてペテーに持續するを許すべきか。國民の道德は其をして惡の懺悔の要なきと共に善に奮進するを要せざる程に、永く無邪氣清淨且簡單にして進み得るか。

此問題に對して誰か然りと答ふるの勇氣ありや。今や世に政治、教育、宗教、公德あらゆる方面に關する慷慨的批評を聞く事頻なり。又從來見得ざる悖德陰謀も將來續々生じ來るべし。總て社會の事物が複雜なるに從て罪惡も陰險に赴くは、歐米の實例に徵して明に、從て又生活の困難、生存競爭の激烈總て其程度を增し來るべし。況や又東亞に

は、妖雲常に天の一方に靉き、國家的意織の必要と國際的手腕の經驗とは益す增加し來るべし、社會問題が既に陰々の勢力となりつゝあるを見ずや。公德問題が盛に識者の頭腦を刺激しつゝあるを見ずや。此等諸問題の解釋は今の論題以外なり、故に言はず。只此の如き社會の大勢より觀察すれば、道德の敗腐といひ、國家隆運に關する掛念といひ、悲觀的批評家のいふ如く、固より悲むべく慨すべき者多しと雖も、此等の大勢は即國民をして大に犯して大に悔ひ、大に迷て大に信ぜしむべき、糾繩微妙の契機ならざらんや。

特に從來は殆ど邦人の經驗に入らざりし社會問題は、工業時代の大勢と共に、切迫して我邦社會に一大惱亂を與へんとしつゝ進めり、之を壓抑せんといふは、赤手潰堤を支へんとする者のみ。苟も國家の進步を庶幾する者は社會問題を壓抑せずして、之を解釋せざるべからず。而も解釋は一朝一夕に簡單にして終るべきか。其解釋に至る迄には尙激烈なる過渡に遭遇する事、亦吾人の覺悟を要すべし。況や其問題

の經濟的社會的解釋が進行すると共に、之に伴ふ道德、思想、信仰の苦悶動搖も亦十分に臍を固めて之に處する覺悟なかるべからず。兎に角日本人は此より益す進て難關を切り拔け切り拔けざるべからず。此時に當りても(今日は既に其序幕に入れり)日本人の宗教的道德的意識は斯くプレチーに又ペテーにして終るべきか、又終り得るか。大苦悶大健鬪なくして、大理想大信仰の時代に到達すべきか。

此問題に對して、然りと答ふる人は、白痴の外になかるべし。然らば日本人の宗教心は、所謂其素質性格の如何に係らず、從來の如く輕妙閑雅の域に安んずる能はずして、其成功の如何に係らず、兎に角大に迷て大に信ぜんと努力するの時至らん。是れ必然の勢なり、恐くは烟眼の士は現今の狀態に既に其機を察せん。

人工的因習的の稱呼ながら、所謂第十九世紀は十日の後に終り、時針の一轉は、夢の如くに望みし第二十世紀を齎し來らんとす。二十世紀以後にも、日本の宗教道德は尙プレチー。ペテーの特色を特續し得べきか。

(三十二年十二月)

十九世紀最終の基督降誕會

廿五日の基督降誕會は數日の後に來らんとす。第十九世紀最後の降誕會として、基督教徒の此に對する感慨如何。回教は其紀元十世紀の終に豫言者出づべしと信じて大動搖を呈したる事ありき。將に二十世紀を迎へんとする基督教徒は何故に此の如き豫言的大運動を起すに能はざるか。遮莫戰爭後四五年にして既に當時の榮辱を忘れ去り、太平謳歌に餘念なく、僅にペストの襲來に驚かざるゝ如き、ペチーなる國民の一部分としては、今日の日本基督教者に多きを望むべからじ。只十九世紀最終の降誕會に際して、彼等の一人にても起て大に振ふの人なきか。敢て促す。

(三十二年十二月)

臘八成道會

臘八に際して、二千四百年の古釋佛が伽耶の寒村、菩堤樹下に惡魔を平げ盡して、明星東天に閃くを望み無翳の大悟に入りしを追想す。

斷有大海流　生死永已除　不復受生

の大覺悟發して、多人の爲に憐愍を生じ、多人をして安樂を得せしめん爲に、四方に初中後善の法を宣布し、義微妙具足無缺の道を傳ふる大慈悲となりし昔を思ひ、翻て其末流二千四百年の佛敎を見れば、吾人は釋迦の爲に又今の佛敎の爲に大息を禁ずる能はず。

所謂公認敎運動といひ、宗派分離管長別置の騷擾といひ、彼處には本堂再建の資金を爭ふあり、此處には本堂燒失の灰燼を賣て遊蕩の資に供する管長あり。否多言するを須ひず、

彼諸世間五慾等　如猛火坑毒藥鴆　往昔已來早辭避
既欲廿鑠智慧水　自心覺了欲覺他

の言を記して、臘八成道の古を忍ばんのみ。

（三十二年十二月）

復活の曙光外篇終

明治三十六年十二月廿九日印刷
明治三十七年一月一日發行

復活の曙光
定價金七拾五錢

著作者 東京市小石川區指ヶ谷町七十八番地 姉崎正治
發行者 東京市麴町區富士見町弐丁目三番地 太田資順
發行所 東京市本郷區本郷四丁目八番地 有朋館
印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 青木弘
印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場

(不許複製)

著作者章	發行者章

發賣元 有朋館
東京市本郷區本郷四丁目八番地
(電話下谷八一六電報略號ユホ)

大賣捌所
●東京。東京堂。上田屋。鶴喜。東海堂。青野。林平。●大阪吉岡。柳原。●名古屋川瀨。●久留米。菊竹。●廣島積善。●熊本長崎次郎。●鹿兒島、吉田。●長崎、安中。●神戸、熊谷。●金澤、宇都宮。●長野西澤●新潟萬松堂。北光社●弘前今泉。●山形牧野●鶴岡地主。

◎東京 有朋館出版圖書賣捌所

東京神田區　京堂
仝　函館
仝　小樽
仝　旭川
仝　岡崎屋
仝　横濱市
仝　勉強堂
仝　播磨屋
仝　神戸市
仝　仙鶴堂
仝　兵庫洲本
仝　供智堂
仝　柏原
仝　淳天堂
仝　姫路
仝　日本橋區
仝　林平次郎
仝　宵野友三郎
仝　東海堂
仝　京橋區
仝　目黑支店
仝　水原
仝　文明堂
仝　高田
仝　本郷區
仝　新潟市古町通北光社
仝　寄年堂
仝　萬松堂支店
仝　佐渡河原田
仝　中山萬平
仝　埼玉浦和
仝　高野幸吉
仝　田中書店
仝　群馬前橋
仝　盛々堂
仝　焕乎堂本店
仝　國光書房
仝　高崎町
仝　焕乎堂支店
仝　千葉東金
仝　多田屋本店
仝　小石川區
仝　杏文堂
仝　千葉町
仝　青森引前市
仝　牛込區
仝　同文館支店
仝　盛文堂
仝　茨城水戸市
仝　青森
仝　八戸
仝　下谷區
仝　東文館
仝　土浦
仝　川又銀藏
仝　山形市
京都寺町
仝　寶文館
仝　栃木宇都宮
仝　伊沼彌助
仝　山形市
仝　三條通り
仝　中村彌二郎
仝　栃木町
仝　內山港三郎
仝　酒田町
大阪東區
仝　吉岡平助
仝　永山吉造
仝　鶴岡
仝　仝
仝　秋文社
仝　川瀨代助
仝　米澤
堺市熊野町
大阪府和泉岸和田町
北村佐平
仝　高須廣治
仝　秋田市
仝　吉見書店
仝　横手町
北海道札幌
木田勝次郎
進振堂書店

仝　魁文社
仝　津市
仝　川南重祐
仝　松田鉀三郎
仝　甲府市
仝　村上粗夫
仝　柳正堂
滋賀長濱
仝　第一有隣堂
仝　彦根
仝　吉田作平
仝　熊谷幸助
仝　大津港町
仝　廣田七次郎
福浦文藏
岐阜市
仝　大須町
仝　太田支店
仝　福井市
仝　松本
仝　郁文堂
仝　長野市
仝　上田町
仝　岡安慶介
仝　飯田町
仝　西澤喜太郎
仝　上諏訪
仝　水琴堂
仝　仙臺市
仝　小林佐平次
仝　福島町
仝　若松町
仝　岩手一ノ關
仝　盛岡市
仝　青森
仝　八戸
仝　酒田町
仝　鶴岡
仝　米澤
仝　秋田市
仝　横手町
福井市
金澤市
富山、富山市

仝　高岡市
仝　海堂
仝　鳥取市元魚町
仝　旭日堂
仝　松江市
仝　濱山
仝　津山
仝　廣島市
山口、山口町
仝　赤間關市
仝　船木町
和歌山市
德島市
丸龜市
高松市丸龜
松山市
伊豫宇和島
仝　今治町
高知市
福岡、博多
仝　柳河町
仝　久留米
仝　大分大分町
仝　中津
仝　佐賀市
仝　唐津
熊本市
仝　八代町
鹿兒島市
沖繩那覇

◎北の他全國各書店

東京帝國大學教授　文學士　登張信一郎著

新教育論　藝術篇

再版
菊　定價金五拾錢　郵稅金六錢

新教育論　科學篇

菊　定價金五拾錢　郵稅金六錢

新教育論　政治篇

菊　定價金五拾錢　郵稅金六錢

新教育論　教育篇

菊　定價金五拾錢　郵稅金六錢

新教育論　人類篇

菊　定價金八拾錢　郵稅金拾錢

◎形式主義、模型主義、常識主義、科學主義は今の教育界の慘狀也謬士出て賢士隱れ凡骨跳梁し天才恨死するは實に昨今吾教育界の頽態也竹風先生こゝに於て、憤慨一番、椽大の筆を振つて、教育の新主義を鼓吹し、萬丈の光焰を吐くこと無慮一千有餘頁。深邃の學、雄健の文相待つて、あちゆる問題を解決する、眞に快刀亂麻を斷つの慨あり。教育者は勿論、詩人文學者等苟も思想問題に着眼せらるゝ諸君子は必ず精讀せられざるべからず。讀者諸君の便を謀りて全部五册に別ちて之を刊行せしもの也。

東京帝國大學教授　文學博士　建部遯吾著

西遊漫筆

再版　增補
菊版洋裝　美本　定價金八拾五錢　郵稅金拾錢

◎是れ水城先生の批評的西洋旅行記。周遊三年、遍歷二十餘國、社會政治宗教教育、燃藜の眼光、照し來りて罔雨跳り、天女舞ふ。別に歐山の奇、米水の勝あり、點綴以て趣を成す。眞に是れ燈下の好伴侶。

文學博士　建部遯吾著

外政時言

目下の大問題
菊版　定價金貳拾八錢　郵稅金四錢

◎これ政事家の瞻にあらず、これ學者の說にあらず、野人の

聲なり、黙声の微言なり。」自序の記する所此の如し、以て本書の性質を知るべし、君國に忠愛の士速に一讀せらるべし。

新歸朝者法學士原田豐次郎著

米國產物世界分散色刷地圖挿入

米國觀

菊版 美本 定價金五拾錢 郵税六錢

▲附錄米國移民法原文並に譯文其他米國重要事項▼

◎著者久く米國に遊び、頗る彼地の事情に通ず、歸來恍然筆を呵して一稿成る、此篇即ち之なり、奇警の觀察、絢爛の彩筆、米國の面目髣髴として紙上に躍如たり、特に米國外交策を論じ、米國國人を評し、東洋移民の前途を慨するの章に至りては、議論縱横、叱咤風生、懶夫爲に起つ、蓋近來の快著なり、渡米者は無論、學者、學生、實業家、苟も米國の眞相を知らんと欲するものは必ず一讀せざるべからず。

文學士加藤玄智著

通俗

東西比較宗教史

菊判洋本 定價七拾五錢 郵税拾錢

◎宗教は千古の秘密、人生の一大問題なり。而も其の發展激

變は決して偶然にあらず、必ず一定系統の存するなかるべからず。本書能く原始宗教に起し、佛耶兩大教はもとより、東西幾多の教旨、公平正確に比較研究し來て、條理明晰、筆端縱横、眼光炬の如し。文體平易にして學生の良參考書たるは勿論苟も眼を人生の大問題に注くの士は坐右必ず一本を備ふるなかるべからず。

東海散士柴四朗著 ●第三版●東亞地圖挿入

日露戰爭

羽川六郎

菊判四百餘頁橫綴り 美術的製本 定價金九拾五錢 郵税金八錢

日露の關係は我神州未曾有の國難なり、唯其れ海戰は如何、陸戰は如何、露國及び列强の狀勢は如何、抑勝敗の決は果して如何、此書は小説にして小説にあらず、實傳にして實傳にあらず、東海散士が縱横なる文藻を確實なる事實に寓し平易に明暢に此問題を解決して我國民諸君の一藥を博せんとするものなり。

東京有朋館編纂

女學生必携

明治卅七年日記

菊判半折洋裝 級美本 定價金廿五錢 郵税金四錢

格言、事蹟、詩歌、俳句、女學校案内、割烹、作法、其他女子必要の事項附錄

世に男子の儒用に應するの日記類多しと雖も女子に適切なるもの絶てなく弊端之を遺憾として最も女學生に必要なる許多の材料を收錄して本日記を編纂し更に教育大家の正閲を請ひ大に其效驗を呈せり江湖の女學生諸君一本を座右に備へて日常の便に供せられよ。

▲太華先生校訂▼

川柳大全

全二册新入美本 定價金四拾錢 郵税金四錢

◎滑稽なること川柳の如きはなし、冷醋なること川柳の如きはなし、痛切なること川柳の如きはなし、ニク〳〵しきチカしきオモシロき皆川柳の如きはなし、此書は川柳中の古秀句五千餘句を集む、新年の讀物として旅窓の讀物として汽車滊船中の讀物として御年玉とし贈物として此川柳大全の如く妙なるはなし。

文學博士姉崎正治著 ○三十七年一月發行

復活の曙光

製本優美高尚 ロース金文字入四六判四百六拾余頁 コロタイプ版名畫貳葉挿入 定價金七拾五錢 郵税八錢

◎物質文明、形式教育の爲に殺されたる靈は、何れの時、如何にして復活すべきか。「復活の曙光」は現れたり。光を認む人は謂ふ凝視せられよ。

獨國 エルンスト、ヘッケル博士原著 高序
日本 文學博士男爵 加藤弘之校閲 井高序
日本 文學士 岡上梁 合編
日本 文科大學研究嗣託 高橋正熊

宇宙の謎

菊版五百余頁總ク ロース金字入製本 定價金錢 郵税金錢

●三十七年一月發行

◎十九世紀の智識の總和は生物學なり、各學問の中心は進化論なり、十九世紀に於ける進化論は十八世紀に於ける太陽中心説と同價値なり、而して當二十世紀の哲學は應に生物學的一元論なるべし、今、ヘッケル氏は生物學の發斗にして進化論の領袖たり、タイヂン及びヂッリスの敬する所、スペンサスの畏るゝ所、眞に宇宙謎語を解くの任ある碩學なり、此書、職業的哲學者を罵倒し、宗教的迷信を掃蕩す、以て二十世紀文明の洗禮を授くるに足る。

(一)人類學の卷、——人間（宇宙謎語とは何ぞ、人躰の構造、人生、吾人の胚胎的發達、人類の歴史）

12/2/37 / 26/12/38

(二)心理學の卷、――精神（精神の本相、心理的階段、精神の胎生發達、精神進化史、意識、精神不滅）

(三)宇宙論の卷、――宇宙（本質法則、宇宙の進化、自然の齊一、神と宇宙）

(四)神學の卷、――神（智識と信仰、學智と基督教、余が一元的宗教、余が一元的倫理教、宇宙謎語の解決）

大學院學生
文部省留學生 文學士吉田熊次著　近刻

社會的倫理學

菊判洋裝
定價金 錢
郵稅金 錢

◎道德の論愈盛にして世人の疑惑益深し。是れ研究法其宜を得ざるに依る。吉田先生多年の研鑽を積み、此書を公す。新新なる見地、至公至平の斷案。眞に倫理學界の一光明。

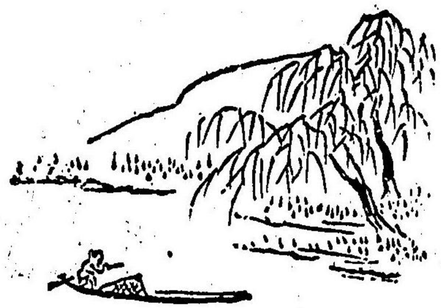
大學院學生
文部省留學生 文學士吉田熊次著　近刻

西洋倫理學史

菊判洋裝
定價金 錢
郵稅金 錢

▲希臘羅馬の部▼

◎希臘羅馬は思潮の泉源也。倫理學學說のパノラマ也。吉田先生大學に在るの日より研究を始め玆に此著成る。眞に斯學研究の好資料附錄二篇二大哲人の倫理說批判。



故高山樗牛沒してよりまさに一ヶ年たらむとするの今日吾等同人相寄りてこゝに樗牛會を組織し敢て大方の贊助を請ふ所以のものは竟畢故樗牛のために紀念事業を起こし其紀念の庭園を以て宗教文藝に志ある人の自由なる集會所となし此に依て亡友の志業を繼紹せむと欲する微意に外ならず想ふに清新の氣風、宗教、文藝の勃興天才の憧憬等は吾等の推奬を俟たずして自から生れ出でんことは自然の數なるべけれども聊か亡友の紀念事業を中心として精神上の文明の爲に努力したき念願と故人に對する吾等の友情とは期せずして同人の一致する所と成り終に左の如き規約の下に樗牛會の成立を見るに至りぬ願くは吾等の愚衷を洞察してこゝに此舉に贊同あらん事を江湖諸兄姉に祈る

樗牛會規約

一、本會ハ故高山樗牛ノ爲ニ紀念事業ヲ擧ゲ幷ニ之ニ必要ナル金額ヲ募集スル爲ニ組織ス

二、紀念事業ハ當分左ノ事項ヲ目的トシ便宜ニ從テ之ヲ遂行ス

一、樗牛ニ關係アル地（多分鎌倉）ニ紀念ノ庭園ヲ開ク

二、園内ニ紀念標ヲ建テ及ビ本會ノ家屋ヲ建築シ之ヲ樗牛關係ノ書類ヲ蒐集スル場所及ビ本會會員ノ集會所ニ宛ツ

三、龍華寺ナル樗牛埋骨地ノ造園ヲナス

三、本會ノ事務ハ當初ノ發起人ヨリ成ル幹事會ニテ處理ス

四、當初ノ贊成人ヲ以テ本會ノ評議會ヲ組織ス

評議會ノ開閉ハ幹事會之ヲ管シ幹事會ハ其決議ニ從テ本會ノ事業ヲ舉グ

五、本會ノ爲ニ金壹圓以上ヲ寄附シタル人及本會ノ爲ニ盡力シタル人ヲ本會々員トス

會員ハ本會ノ集會ニ出席シ及ビ園ヲ使用スルヲ得

六、紀念園開園式ヲ舉グルノ日ヲ期シテ本會ヲ財團組織トナス

明治三十六年十月

發起人

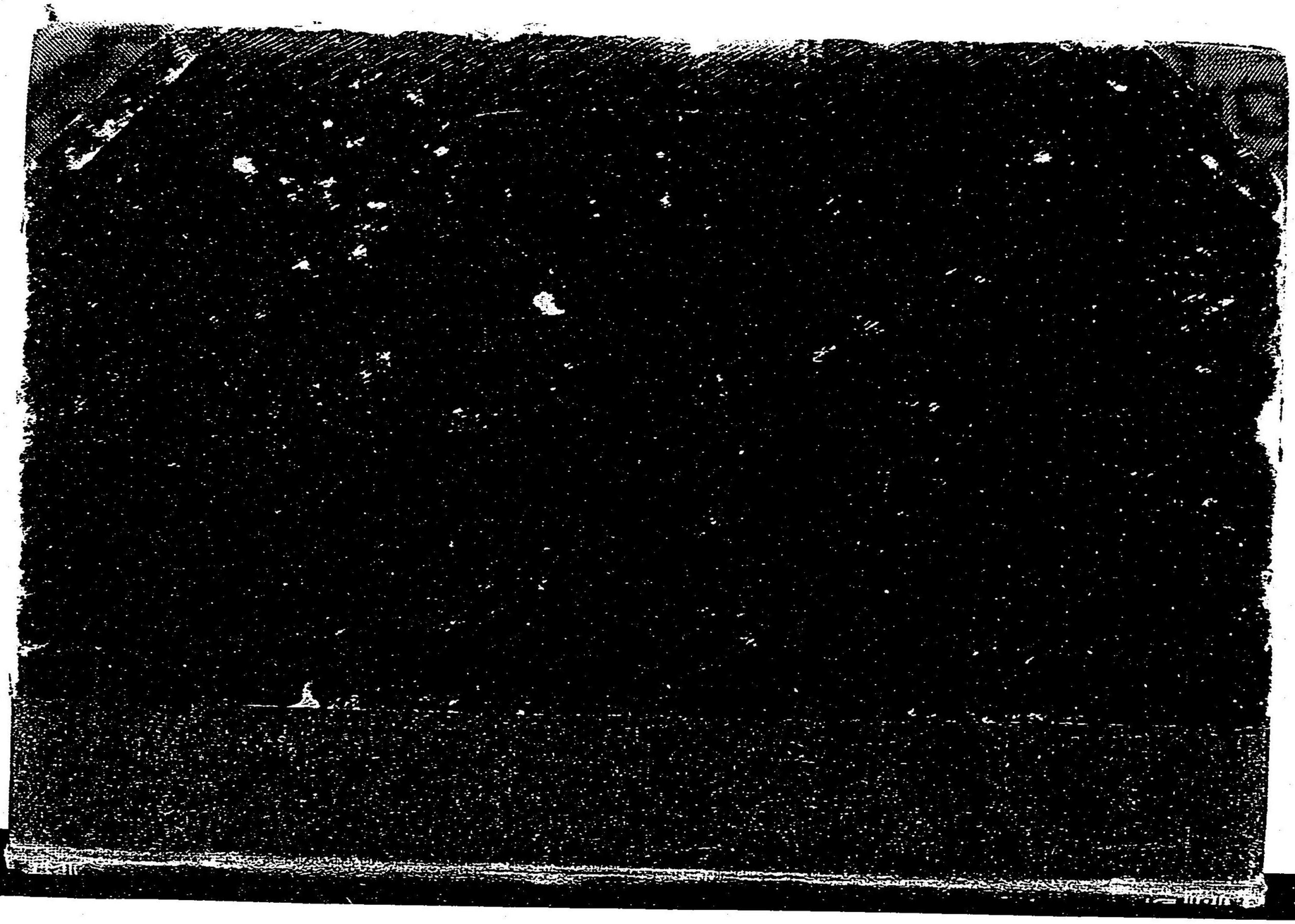
長谷川登　張井柳　藤崎　姉崎　井上信　都健　川治　井上哲次郎　大谷雄　井上季　長坪内雄忠　田中藏　坪内敏一　三浦菊太郎　桑木嚴翼　谷善四郎　田中喜一　上田敏　佐藤文　大橋新太郎　上田萬年　佐藤政吉　島文次郎　菅沼達治　（他二名照合中）

賛成人

新井正一郎　玉城肇　新井一郎

追て本會會員となり本會の爲に義金を投せらるる諸君は出金額と住所氏名とを東京小石川指ヶ谷町七十八番地姉崎正治に申込みありたし又本會は勸誘員集金人の類を差出さざるにつき出金は直接右姉崎に申込み又は送金あらん事を乞ふ

本會學術講演は第一回を十月卅一日に開き其より以後便宜東京諸區幷に地方諸都市を巡回す地方にて右講演開會希望の向は右姉崎に申込みを乞ふ



96
390

013761-000-2

96-390

復活の曙光

姉崎　正治／著

M37
ABA-0250